

3月に発見されたミヤマクワガタを考える

高桑正敏 (学芸員)

異常な?事態

なんと、春もまだ早い3月18日のこと、1頭のミヤマクワガタのオスが当博物館の屋上で見つかりました。発見者は、清掃業務に携わっておられる高橋末造さん。

翌日にその個体を見た私はびっくりしました。というのも、この人気あるクワガタムシはふつうだと6月下旬から9月にかけてしか、成虫を見かけることがないからです。もう少し説明すると、ミヤマクワガタは夏に現れますが、秋にはみな死んでしまいます。オオクワガタやヒラタクワガタとは違って短命ですし、飼育しても冬を越すことがないとされていたからです。だから、3月に発見されるというのは、異常な?事態なのです。もしかすると、これも温暖化現象のなせる業なのでしょうか?

3月に生きていた証拠

博物館の屋上へは鍵が掛けられており、一般の入館者は立ち入ることはできません。18日は週1回の清掃のために高橋さんが鍵を開けて屋上に入り、作業中にコンクリート床上で本個体を発見したのです。高橋さんは前の週にはそれを見ていないので、本個体はこの1週間の間に屋上にやってきたこととなります。

ただし、ここで1つ問題がありました。発見されたときは、動いていなかったというのです。だから、前年の夏に屋上のどこかで死んでしまったものが、たまたま風か何かのせいで見つかりやすい床上にころがった可能性があります。それなら、別に大騒ぎすることもないのでしょうか、次に述べるように状況はまったく違うのです。

さて、発見された当日は、本個体は新井一政学芸員が受け取りました。その時点では、肢(あし)も柔らかく動く状態であり、まだ生きていますか、あるいは死んだばかりの様子であったそうです。翌日に私が見たさいも、肢や触角がやや固めながら動く状態でした。もし、前年の夏に死んだ個体なら、乾燥してカチンカチンのはずです。さらに、本個体の複眼は黒褐色をしていました。死んで時間がたっ

た個体は、茶色に変わってしまうのです。以上のことから、発見時の本個体は死亡の直前ないし直後であったことにほぼまちがいありません。すると、本個体は3月に生きていたこととなります。

長く活動してきた個体

この個体をくわしく調べると、大顎(おおあご)の先端部や内歯は摩耗して光沢があり、前胸の背中中央付近、鞘翅(しょうし:固いはね)の基部の後方や両ばねの含ませ目などの細かな毛ははげ落ち、腹側の後胸の毛も寝た状態にあるばかりか、鞘翅の汚れ(ロウ状物質の付着など)も著しく、また肢の歯突起の損傷もめだつ、という特徴がありました。これらの点は、成虫として長いこと活動してきた個体、つまり私たち昆虫界に生きる者たちの言葉で表現すれば“新鮮でない”個体であることを物語っています。

もしかすると大発見?

これまで述べた点をまとめてみましょう。第1に、3月中旬に生きていた。たぶん、どこからか自力で飛翔して当博物館の屋上にやってきた。第2に、すでに長いあいだ活動してきた。つまり、この3月に材中の蛹(さなぎ)室から出てきた新成虫ではなく、前年の夏から活動してきた個体であろう。となれば、本個体はこの冬を成虫で過ごしたはずですが。

ところが、最初に説明したように、本種の成虫は自然状態では夏期に限って出現し、秋には死亡してしまうと考えられています。もし、秋冬を過ごしたとなれば、初めての例かもしれませんが……。そうなら大発見なのですが……。

新成虫を取り出して飼育した?

ところで、最近のクワガタムシ飼育ブームは、まさに超過激。昆虫専門誌「月刊むし」には、このところクワガタの飼育に関係した広告が分厚く掲載されているほどです。

こうした中で出版された小島啓史さんの「クワガタムシ飼育のスーパーテクニック」という本を斜め読みしていて、アッと驚いてしまいました。ミヤマクワガタの場合、夏に材中の蛹室

内で新成虫となった個体(自然状態なら蛹室内にとどまったまま翌年の夏まで動かずに過ごす)を強制的に取り出して飼育すると、冬を活動させた状態で越すことができる、と書いてあったからです。このことから、3月に発見された個体のナゾときが可能です。つまり、そのようにして飼育されていたものが、当博物館近くで逃げたか放たれたかしたもの、と解釈するのが、本当のところはわかりません(ここが肝心です)が、今の時点ではそう解釈しておくべきでしょう。なんだか、とてもつまらない、夢のない結果となってしまいました。

飼育する際のこわさ

飼育行為は、時とすると、自然の営みから外れた状況を生んでしまいます。本当に偶然でしたが、この原稿を打ち込んでいるまっ最中に、私の息子が血相をかえて熱帯性のあるチョウを持ってきました。友だちが小学校で見つけた蛹から出てきたものですが、関東地方でのこのチョウの自然状態での蛹の発見はおそらく初めてのことで、近年の亜熱帯~熱帯性昆虫の北上を示す例として大変重要です。しかしこの場合でも、飼育していた幼虫を誰かが放したものの、という可能性がまったくないとは言いきれません。

地域の自然誌の解明も、私たち学芸員に課せられた重要な仕事です。近年の温暖化による?昆虫の生態変化や北上現象をリアルタイムで把握するのも、その1つです。ところが、上記のような例は、飼育による結果かどうかをまず疑ってみなければなりません。もちろん、正解は必ずしも明らかではありません。だから研究者にとっては、難しい判断を要求される時代になってきたと言えます。もっとも、皆さんが全員、生きものを飼育する場合に、最後まで責任を持って管理してくれたら問題ないのですが。

末尾ながら、いつも当博物館内で発見した昆虫を届けてくださる高橋末造さんはじめ、OBMの方々から心から感謝いたします。